

とよなか ゆめ・まち・ひと

リレーエッセー



祭と神社と故郷と。

ふるさと

祭が紡ぐ不思議なご縁

私は阪急宝塚線服部天神駅から東南へ約1.5キロメートルの豊中市浜に生まれ、小・中・高・大学・社会人を含めて33年間を豊中で過ごしました。大学卒業後に入社したのは、後に造船から事業転換して環境装置メーカーとなった日立造船。入社後10年にして初の転勤先がシンガポールで、生まれて初めて地元を離れることになりました。家族とともに赴任し、8年を経て東京へ帰任、51歳で再び大阪勤務となり今日に至っています。

大阪への転勤時には子どもの学業の関係で妻子3人を東

京に残し、以来26年間大阪―東京間を往復する生活を続けています。生活の拠点は自然と家族がいる東京になり、33歳で地元を離れてからほとんど思い出す機会はなかったのですが、ある機会に「人は自分の意識とは関係なく誰しも地元と強くつながっているのではないか」と感じるようになりました。そのことについてお話ししたいと思います。

子どもの頃、竹笹を手に獅子追いをした地元の秋祭りが楽しみでした。この祭りは毎年10月（現在は体育の日）に行われ、南郷春日神社の神前

で獅子舞を奉納後、獅子舞が地域の各戸を回り、豊作と人々の健康を祝うものです。南郷春日神社は、史跡春日大社南郷目代今西氏屋敷として平成21年（2009）2月12日には国の指定を受けています。春日大社の莊園を管理するために来住した莊官・今西氏の屋敷である同史跡には、「奈良春日社から遣わされた神鹿の墓」という言い伝えがある鹿塚もあり、春日大社との強い関係を示しています。

さて、奈良の春日大社では毎年12月に春日若宮おん祭が行われます。この祭礼は、保

ふる かわ みのる

古川実 [日立造船株式会社相談役]

昭和18年（1943）豊中市生まれ。市立小曾根小学校、市立第四中学校、府立豊中高校、大阪大学経済学部卒業。同41年、日立造船株式会社に入社。同51年にシンガポール共和国へ赴任するまで豊中市に在住。主に経理畑を歩み経理部長、専務、社長、会長兼社長を経て平成29年（2017）6月から現職。





延2年（1136）、時の関白・藤原忠通が当時の大和の国の万民が洪水や飢饉のため大変苦しんでいたのを憂い、若宮の神に数々の芸能を奉納し、丁重にお祭りをしたところ天下が無事に治まったのが始まりと言われています。以来、その神徳にあやかっ、今日まで一度も途切れることなく続いています。

このおん祭の重要な役割を担うのが日使です。関白・藤原忠通がこの祭りに向かう途中、にわかに病となり、お供の楽人に「その日の使い」をさせたことに始まると言われています。以来、今日まで続く日使の役割は、平成10年から関西の財界人が春日大社から任命を受けており、担った人物は関白の格式を表す正装をして、おん祭の中心的な大役を果たします。私は光栄にも平成27年880代日使ご奉仕の大役を仰せつかりました。関西には多くの財界人がいるので、私がこの役目を仰せつ

Q. 座右の銘は何ですか？

A. 『ローマは一日にして成らず。』

大ローマ帝国は長期の努力によって建設されたように、大事業を完成させるには不断の努力が大切である例えとして使われることわざであるが、その大ローマ帝国も今は無い。

大事な事は、不断の努力をする者とダーウィンが言う変化する者のみが生き残るという鉄則である。

新型コロナウイルス後の世界をどう生き抜いてゆくのか、その行動が未来を決するであろう。

とは思いますが、寄らないことではありませんから、これも子ども時代、南郷春日神社の秋祭りでご縁が結ばれたからではないかと考えています。

不思議さを感じると同時に、一期一会を大事に生きてゆかねばと考えています。また、生まれ故郷があることの幸せをつくづく感じています。会社生活を引退した折には、故郷の豊中市で、子どもの頃に楽しんだ地元の祭りにまた参加したいと思っています。